

# 忠度

古名

短冊忠度

世阿弥作

季は	地は	後	前
シテ	ワキ	シテ	ワキ
薩摩守忠度	前に同じ	樵の翁	旅僧

「花をも憂しと捨つる身の。く。月にも雲は厭は  
じ。

詞 「是は俊成の御内に在りし者にて候。さても俊成な  
くなり給ひて後。かやうの姿となりて候。又西国  
を見ず候ふ程に。此度思ひ立ち西国行脚と心ざし  
候。

サシ 「城南の離宮に趣き。都を隔つる山崎や。関戸の宿  
は名のみして。泊りも果てぬ旅の習ひ。憂き身は  
いつも交りの。塵の浮世の芥川。猪名の小篠を分  
け過ぎて。

下歌 「月も宿かる昆陽の池。水底清く澄みなして。

上歌 「蘆の葉分の風の音。く。聞かじとするに憂き事  
の。捨つる身までも有馬山。隠れかねたる世の中  
の。憂きに心はあだ夢の。覚むる枕に鐘とほき。

難波は跡に鳴尾渦。沖浪遠き小舟かな。く。

「実に世を渡る習ひとて。かく憂き業にもこりずま

の。汲まぬ時だに塩木を運べば。乾せども隙は馴衣の。浦山かけて須磨の海。

「海人の呼声ひまなきに。しばらく千鳥音ぞとほき。

サシ  
「そもそも此須磨の浦と申すは。淋しき故に其名を得る。わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に。もしほたれつゝわぶと答へよ。實にや漁の海人小船。藻塩の煙松の風。いづれか淋しからずと云ふ事なき。

詞  
「又此須磨の山陰に一木の桜の候。是は或る人の亡き跡のしるしの木なり。殊更時しも春の花。手向の為めに逆縁ながら。足引の山より帰る折ごとに薪に花を折りそへて。手向をなして帰らん。く。  
カ。

シテ詞

「さん候此浦の海人にて候。

ワキ

「海人ならば浦にこそ住むべきに。山ある方に通は

んをば。山人とこそいふべけれ。

シテ「そも海士人の汲む汐をば。焼かで其まゝ置き候ふべきか。

ワキ「實にくここれは理なり。藻塙たくなる夕煙。

シテ「絶間を遅しと塩木とる。

ワキ「道こそかはれ里ばなれの。

シテ「人音稀に須磨の浦。

ワキ「近き後の山里に。

シテ「柴といふ物の候へば。

地「柴といふ物の候へば。塩木の為めに通ひ来る。

シテ「余りに愚なる。御僧の御詫かなやな。

地「實にや須磨の浦。余の所にやかはるらん。夫れ花につらきは。嶺の嵐や山おろしの。音をこそ厭ひしに。須磨の若木の桜は。海少しだにも隔てねば。

通ふ浦風に。山の桜も散る物を。

「如何に尉殿。はや日の暮れて候へば。一夜の宿を

シテ詞  
御かし候へ。

「うたてやな此花の陰ほどの御宿の候ふべきか。」

ワキ 「実にくく是は花の宿なれどもさりながら。誰を主と定むべき。」

シテ 「行き暮れて木の下陰を宿とせば。花や今宵の主ならましと。詠めし人は此苔の下。痛はしや我等が様なる海人だにも。常は立ち寄り弔ひ申すに。御僧達はなど逆縁ながら弔ひ給はぬ。おろかにます人々かな。」

ワキ 「行き暮れて木の下陰を宿とせば。花や今宵の主ならましと。詠めし人は薩摩の守。」

シテ 「忠度と申しゝ人は。此一の谷の合戦に討たれぬ。ゆかりの人の植ゑ置きたる標の木にて候ふなり。」  
ワキ 「こはそも不思議の值遇の縁。さしもさばかり俊成の。」

シテ 「和歌の友とて浅からぬ。」

ワキ  
「宿は今宵の。

シテ  
「主の人。

地  
「名も唯法の声聞きて。花の台に座し給へ。

シテ  
「有難や今よりは。かく弔ひの声聞きて。仏果を得んぞ嬉しき。

地  
「不思議や今の老人の。手向の声を身に受けて。喜ぶけしき見えたるは。何の故にあるやらん。

シテ  
「御僧に弔はれ申さんとて。これまで来れりと。

地  
「夕の花の陰に寐て。夢の告をも待ち給へ。都へ言づて申さんとて。花の陰に宿木の。行くかた知らずなりにけり。／＼。  
(中入)

「先々都に帰りつゝ。定家に此事申さんと。

歌  
「夕月早くかげろふの。／＼。おのが友よぶ村千鳥の。跡見えぬ磯山の。夜の花に旅寐して。浦風までも心して。春に聞けばや音すごき。須磨の閑屋の旅寐かな。／＼。

ワキ詞

「恥かしや亡き跡に。姿を帰す夢の内。覚むる心は  
 いにしへに。迷ふ雨夜の物語。申さん為めに魂魄  
 に。うつりかはりて來りたり。さなきだに妄執多  
 き娑婆なるに。何中々の千載集の。歌の品には入  
 りたれども。勅勘の身の悲しさは。よみ人知らず  
 と書かれし事。妄執の中の第一なり。されどもそ  
 れを撰じ給ひし。俊成さへ空しくなり給へば。御  
 身は御内にありし人なれば。今の定家君に申し。  
 然るべくは作者を附けてたび給へと。夢物語申す  
 に。須磨の浦風も心せよ。

地クリ  
ワキサシ  
 「實にや和歌の家に生れ。其道を嗜み。敷島の蔭に  
 依つし事。人倫に於て専らなり。

「中にも此忠度は。文武二道を受け給ひて。世上に  
 眼高し。

地  
 「そもそも後白河の院の御宇に。千載集を撰ばる。  
 五条の三位俊成の卿。承つて之を撰ず。

下歌

「年は寿永の秋の頃。都を出でし時なれば。

上歌  
「さも忙はしかりし身の。く。心の花か蘭菊の。

狐川より引き返し。俊成の家に行き。歌の望みを嘆きしに。望み足りぬれば。又弓箭にたづさはりて。西海の波の上。暫しと頼む須磨の浦。源氏の住み所。平家の為めはよしなしと。知らざりけるぞはかなき。

地  
「さる程に一の谷の合戦。今はかうよと見えし程に。

皆々舟に取り乗つて。海上に浮ぶ。

シテ詞

「我も船に乗らんとて。汀の方に打ち出でしに後を見れば。武蔵の国の住人に。岡部の六弥太忠澄と名のつて。六七騎にて追つかけたり。是こそ望む所よと思ひ。駒の手綱を引つかへせば。六弥太がてむずと組み。両馬が間にどうと落ち。彼六弥太を取つておさへ。既に刀に手をかけしに。

地  
「六弥太が郎等。御後より立ちまはり。上にましま

す忠度の。右の腕を打ち落せば。左の御手にて。

六弥太を取つて投げのけ。今は叶はじと思し召し

て。そこのき給へ人々よ。西拝まんと宣ひて。光

明遍照十方世界。念佛衆生攝取不捨と宣ひし。

御声の下よりも。痛はしやあへなくも。六弥太太

刀を抜き持ち。つひに御首を打ち落す。

シテ「六弥太心に思ふやう。

地「痛はしや彼人の。御死骸を見奉れば。其年もまだ

しき。長月頃の薄曇り。降りみ降らずみ定めなき。

時雨ぞ通ふ村紅葉の。錦の直垂は。たゞ世の常に  
よもあらじ。如何さま是は公達の。御中にこそあ  
るらめと。御名ゆかしき所に。簾を見れば不思議  
やな。短冊を附けられたり。見れば旅宿の題をす  
ゑ。行き暮れて木の下陰を宿とせば。

シテ「花や今宵の主ならまし。忠度と書かれたり。

地「さては疑ひ嵐の音に。聞えし薩摩の。守にてます

ぞ痛はしき。

地  
「御身此花の。陰に立ち寄り給ひしを。かく物語申  
さんとて。日を暮らしとゞめしなり。今は疑ひよ  
もあらじ。花は根に帰るなり。我跡とひてたび給  
へ。木陰を旅の宿とせば。花こそ主なりけれ。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第三輯』大和田建樹著